

20世紀における日本の詞論研究

萩原正樹

—

日本における詞の最初の作品は、嵯峨天皇の「漁歌子」五闕とこれに奉和した有智子内親王及び滋野貞主の作七闕である（神田喜一郎博士『日本における中國文學Ⅰ』、『神田喜一郎全集』第6巻所収、同朋舎出版、1985、初出は二玄社刊、1965、参照）。これらの作品は、平安時代・弘仁14年（823）に作られたものであり、唐・張志和の「漁歌子」制作（大曆9年、774）から僅か49年しか隔たっていない。古來、中國の洗練された文化は、常に日本人の敬慕の対象となっており、嵯峨天皇たちも、中國最新の歌謠文學である詞をいち早くとりいれたのであった。

平安時代には他に、醍醐天皇の皇子兼明親王の白居易「憶江南」詞に倣った「憶龜山」詞二闕が残されているが、その後、江戸時代に至るまで詞の作品は記録されていない。江戸期には複数の詩人が填詞に手を染め、田能村竹田の『填詞圖譜』という詞譜まで現れたが、今日から見ると、なお趣味的な習作や通俗的な理解と見なさざるを得ない。詞の本格的な制作と研究は、明治以降に始まると言っても過言ではないのである。

張志和「漁歌子」とほぼ同時期に始まった日本の詞學史は、19世紀後半に至ってようやく活況を呈し、20世紀へと受け継がれていった。日本では現在でもなお詞の研究者は比較的少なく、中國の研究者層の厚さには比ぶべきも無い。だが注目すべき研究も少なからず見られるのであり、21世紀を迎えるにあたって、これらの研究成果を再認識し、次代への展望を得ることは、大いに意味のあることであろうと思う。小稿では、特に詞の文學理論研究に絞り、20世紀における日本の詞論研究を概観してみたい。

なお、唐宋詞研究全般にわたっては、村上哲見氏の業績をはじめとして数多くの成果があげられているが、今回は詞論研究に限定したために、それらについては觸れていない。近年の研究成果に関しては、松尾肇子氏「日本における詞の研究の現状と課題」（『未名』第11號所収、1993）を参照して頂きたい。また、詞學關係の文獻目録には、松尾肇子氏編「日本國內詞學文獻目録補稿（1998.07.24版）」（<http://www.res.otaru-uc.ac.jp/~hagiwara/matsuo.html>）があり、小稿執筆に際しても参考にさせて頂いた。

二

明治・大正期に最も活躍した詞人は、森槐南（名大來、字公泰、號秋波禪侶等。1863-1911）、高野竹隱（名清雄、字鐵生、號修簫仙侶。1862-1921）、森川竹篔（名鍵藏、字雲卿、號鬢絲禪侶。1869-1918）の三名である。このうち、森川竹篔は實作のみならず、詞の研究方面にも大きな業績を残した。

森川竹篔は、多くの詞作の發表と並行して、『詞法小論』（『鷗夢新誌』第33-65號所収、1888-1891）、『詞律大成』（『詩苑』第1-48號所収、1913-1917）という二つの詞譜を編纂した。この

うち『詞律大成』は、「發凡」に「萬氏詞律所收者六百五十九調，一千一百七十三體，今所刪者十二調，一百十二體，所補者一百九十六調，六百三十五體，凡所錄者八百四十三調，一千六百九十六體，其註則全改之，閒錄舊註者，皆以萬氏曰冠之，名曰詞律大成，依舊分爲二十卷，萬氏未錄大曲，今編爲一卷，名曰詞律補遺，附其後焉」と記されているように，萬樹『詞律』の六百五十九調，また『欽定詞譜』の八百二十六調を超えた，八百四十三調の詞牌を録しており，當時最大の詞譜であった。内容的にも『詞律』『欽定詞譜』を補う高見卓説が隨處に見られ，その價値は今後さまざまな視點から見直されるべきであろう。

また森川竹溪は，早くから清代の詞論にも注目し，清・賀裳の『皺水軒詞筌』（『鷗夢新誌』第70號所收，1892），王士禛『花草蒙拾』（同第84號所收，1893），蔣敦復『芬陀利室詞話』（同第104集所收，1895）の原文を雑誌『鷗夢新誌』に掲載して，日本の詞人たちへの紹介を行っている。さらに，彭孫通の『詞統源流』に對しては，森川竹溪自らが箋を附し，『鷗夢新誌』の第84號（1893年）から第104號（1895年）にわたって連載している。竹溪の箋は，『詞統源流』原文中の詞牌や詞人名に關する注がほとんどで，なお充分なものとは言い難いが，近代日本における最初期の詞論研究として注目し値する。竹溪は，これらの詞話の紹介を通して，日本においても多くの人が詞に關心を持ち，一人でも多くの詞人が生まれることを強く願っていたのであった。なお雑誌『隨鷗集』第48編（1908年12月5日刊）の廣告に，『鷗夢叢書』の一として『白石道人詩說』『花草蒙拾』『北江詩話』『石溪舫詩話』『詞統源流』『靈芬館詞品』『芬陀利室詞話』を収めた一冊本出版のことが見えている。これが実際に出版されたか否かは不明であるが，もし出版されていたとすれば，20世紀日本における詞論研究の冒頭を飾る著作と言えるであろう。

日本の詞壇を勃興したいという竹溪の願ひも虚しく，森川竹溪の死後，しだいに詞の實作者は減少していった。戦前，戦中には文學研究全體が停滯したが，この暗黒時代において，中田勇次郎氏（1905-1998）が行った研究が注目される。

中田氏は，1935年に京都帝國大學を卒業し，翌1936年に卒業論文であった「兩宋詞人姓氏考」を雑誌『支那學』第8卷2號に發表して，研究者として出發された。以後，「唐五代詞韻考」（『支那學』第8卷4號所收，1936），「詞律に見えたる重疊韻の例に就いて」（『支那學』第9卷2號所收，1938）と詞韻に關する研究を行い（以上三論文は，いずれも『讀詞叢考』所收），1940年には南北兩宋の詞人一七名を概觀した『宋代の詞』（弘文堂書房刊），1942年には張惠言の『詞選』に譯注を施した『詞選』（弘文堂書房刊）を出版されて，詞の世界を日本の讀者に廣く紹介することにも努められた。また，詞論においても，1950年前後に宋・沈義父『樂府指迷』，宋・張炎『詞源』下卷，元・陸輔之『詞旨』の現代日本語譯を試みられ，後年の論文集『讀詞叢考』（創文社刊，1998）に収録された。これらの口語譯は，日本における最初のものであり，きわめて價値が高い。さらに，詞論ではないが，詞論と關わりの深い姜夔の『白石道人詩說』を「南宋の詩說一姜白石について」（『四季』第5號所收，1947，また『讀詞叢考』所收）において翻譯され，宋代文學理論の一端を紹介された點も特筆すべきであろう。

三

清代の詞話については，竹溪の紹介以後，目立った研究はほとんどなされなかったが，1950年に至って青木正兒氏（1887-1964）の『清代文學評論史』（岩波書店刊）が出版され，これによって清代の詞論について概觀できるようになった。『清代文學評論史』は全十章，その第九章を「填

詞評論」とし、「一、清初の詞家」「二、浙西派」「三、常州派」の三節に分けて論じられている。各詞話の主張を丹念に拾いながら系統づけられたもので、現在においても清一代の詞論を通観するのに最も便利な書物である。清代の詞作や詞論が、浙西派と常州派の二派に大別できることは言を俟たないが、青木氏はこの兩派について「浙西派と常州派との別は宛も詩壇に於ける格調派と性靈派との別に類似した處が有る。常州派が主張する『意内言外』は性靈の尊重に外ならないし、浙派が技巧に重きを置くのは主として格調を講ずるわけである。兩派の根本的相違は此處に在る」と論じ、兩派の違いの要點を看破された。このような青木氏の説を出発点として、1964年には伊藤虎丸氏が「『雅俗』の理念を中心としてみた張惠言の詞論について一詞選の位置一」（『内野博士還曆記念東洋學論文集』所収、漢魏文化研究会刊）を發表し、張惠言の詞論の分析を試みられた。

清末から民國にかけて活動した王國維（1877-1927）の學問は、日本の中國學に少なからぬ影響を與えた。その『人間詞話』は、日本でも早くから注目され、特に『人間詞話』中に提倡されている「境界」説については、中國と同様、日本でもさまざまな議論がなされている。これらの議論のうち、最も注意すべきなのは、竹村則行氏の論文「王國維の境界説と田岡嶺雲の境界説」（『中國文學論集』第15號所収、1986）である。

王國維は、生涯のうち二度、日本人田岡嶺雲（名佐代治、1870-1912）と交渉を持った。最初は1899年、上海の東文學社において教師（田岡嶺雲）と學生（王國維）として、また二度目は1905年、蘇州の江蘇師範學堂における同僚教師としてである。竹村氏は、このような田岡嶺雲の評論文「美と善」「神祕教の接神を論ず」「元良氏の參禪日誌を讀みて禪に關する我所懷を述ぶ」等に、「無我」「境界」という語が頻繁に用いられている點に注目された。そして、王國維『人間詞話』に、田岡嶺雲の文章と類似した表現が見られることを具體例を擧げて示し、王國維が主張した「境界」説の直接の淵源が、田岡嶺雲の「境界」説にあったことを論證されたのである。その後、岸洋子氏も「王國維と田岡嶺雲—『人間詞話』をめぐる」（安藤彦太郎編『近代日本と中國』所収、汲古書院刊、1989）で、さらに詳細に兩者の關係を論じた。このような、中國人と日本人との學問・文學上における直接の關係をめぐる研究は、日本側研究者にとっては資料面で有利な條件がそろっており、今後の一層の發展が望まれる。

四

1980年より1992年まで、十年あまりにわたって、青山宏氏は「宋人詞話集」(1)-(7) ((1)は「漢學研究」第18・19號所収、1980、(2)は「漢學研究」第20號所収、1983、(3)之一は「漢學研究」第22・23號所収、1985、(3)之二は「漢學研究」第24號所収、1986、(4)は「漢學研究」第26號所収、1988、(5)は「漢學研究」第28號所収、1990、(6)は「日本大學人文科學研究所紀要」第42號所収、1991、(7)は「日本大學人文科學研究所紀要」第44號所収、1992)を連載された。これは、映庵の『彙輯宋人詞話一補詞話叢編』（廣文書局刊、1970）を補う目的のため、宋人の詩話、筆記、序跋類などに見える詞に關する記事を丹念に集められたもので、すべて59種の資料から430條の記事を引いており、その價值はきわめて高い。近年、中國においても、施蟄存・陳如江編『宋元詞話』（上海書店出版社刊、1999）などの宋人詞話収集のすぐれた仕事が行なわれているが、青山宏氏の業績も高く評價される必要がある。

また青山氏は、これらの採集作業を基礎に、その『唐宋詞研究』（汲古書院刊、1991）の第三章

に「北宋の詞論」を収めて、范雍、晏氏父子、歐陽脩、王安石、蘇軾、黃庭堅、晁補之、張耒、李之儀、蘇籀、黃裳、李清照らの詞論を精緻に検討され、體系化された。北宋の詞論については、日中兩國ともにまだあまり研究が進んでいないと思われ、青山氏の研究は、先驅的なものと言ってよい。なお青山氏は、1978年に「玉田詞論稿」（『東洋文化』第58號所収、また『唐宋詞研究』所収）を發表され、『詞源』を中心に張炎の詞論を概観されている。

張炎の『詞源』は、宋代の詞論研究において、最も重要な書物の一つである。内容・規模両面において、『詞源』が他の著作の群を抜いていること、言を俟たないであろう。この『詞源』の巻下に対して、明木茂夫、玄幸子、澤崎久和、保刈佳昭、松尾肇子、萩原正樹の六名が、詳しい注釋と日本語譯を施す作業を行って、1992年に『張炎「詞源」譯註稿』第一冊を刊行し、1999年に第五冊をもって完結した。従來の『詞源』研究は、参照したテキスト數も少なく、注解も特定の語彙に限られており、なお十分なものとは言い難いものであった。我々六名は、まず可能な限り『詞源』の諸本を収集して、秦恩復の『詞學叢書』本を底本として詳細な校勘記を附し、『詞源』諸本の系統を明らかにした。また出現語彙全般にわたって、特に口語語彙や評論・詩話用語との関連に留意した詳細な注を施し、さらに日本語による譯解を加えている。この譯註の完成によって、『詞源』の文學理論を考究する上での基礎ができたものと自負している。なお、『張炎「詞源」譯註稿』は斷續的に私家版の形で刊行を續けてきたが、近い將來、一冊にまとめて出版する計畫が進行中である。これが出版されて、廣く國內外の研究者に参照され、新世紀の詞論研究の一助となれば、望外の幸せである。

『張炎「詞源」譯註稿』に参加した六名のうち、松尾肇子氏は『詞源』についての專論を發表している。まず松尾氏は1985年に「『詞源』と『樂府指迷』」（『日本中國學會報』第37號所収）を著し、『詞源』と沈義父『樂府指迷』とについて、當時の詞壇の状況の中での位置付けから比較を行った。以後、「明清における『詞源』の受容」（『汲古』第33號所収、1998）、「宋末元初の詠物詩—『詞源』を中心に—」（『岐阜經濟大學論集』第32卷1號所収、1998）、「『詞源』の景情交鍊説をめぐって」（『未名』第18號所収、2000）、「張炎『詞源』の清空説について」（村上哲見先生古稀記念論文集刊行委員會編『中國文人の思考と表現』所収、汲古書院、2000）を次々と發表して、『詞源』中の理論解明にあたった。特に「張炎『詞源』の清空説について」では、『詞源』の理論を解くキーワードである「清空」「質實」「疎快」の三語をとりあげて、その語義の變遷を丁寧に迹付け、「清空」と「質實」とが對立概念であり、また「疎快」は「清空」「質實」兩者とも異なる内容を持っていることを明らかにされた。さらに、「質實」の意味するものを、虛字・對句の使用という觀點から姜夔と吳文英の實際の作品例を舉げて分析し、「質實」とは吳文英詞のように實字と對句を多用したものを言うのであり、歌謠文學としての詞にとっては表現上の缺點であると理解されていたのではないかと論じられた。松尾氏の研究は、詞論中の諸概念を、詩話、評論類などの語彙からだけでなく、作品の具體例から分析・検討される點に特徴がある。このような方法は非常に有効であり、今後の成果を期待できよう。

また、明木茂夫氏も、「『詞源』犯調考—その『犯』の意味するもの—」（『文學研究』第90號所収、1993）、「『詞源』宮調俗名考—その命名法に見る〈読み替えの構造〉—」（『中國文學論集』第24號所収、1995）など、主に『詞源』の音樂理論に着目した研究を進めている。

五

以上に、きわめて簡単に 20 世紀における日本の詞論研究を概観したが、最後に今後の課題について述べておきたい。

冒頭にも記したように、日本においては、中國と比べて、詞の研究者が少ない。これは、非常に重要な問題である。詞と詞論の研究を充實・發展させていくためには、研究者層を増やすことが喫緊の課題であろう。

研究面については、次の四點が、詞論研究における大きな課題であろう。

まず一つは、基礎研究をより一層充實させることである。既に青山宏氏の宋人詞話収集の仕事があるが、さらに廣く資料を収集整理して詞論の實體を明らかにする必要がある。また諸版本の研究や、詞論の正確な讀解・注釋、さらに日本語譯なども行っていかなければならない。

第二は、詞論と詞人の作品に関する研究である。松尾肇子氏は、『詞源』と諸詞人との関連について研究を進めているが、他の詞論についても詞の具體例との比較・検討の作業を行っていく必要があるだろう。

第三は、詞論と詩話・文章論等との関連に関する研究である。詞論も中國文學理論の一であり、當然、詩論・曲論・文章論等との関係を有している。両者の比較や影響關係の究明など、なお明らかにすべき問題が多いと言わなければならない。

第四は、清代詞論に関する研究である。清代には詞學が再興し、多くの重要な詞論が著された。日本でも青木正兒氏にこれらの概観があるが、より詳細に各詞論を検討していかなければならない。またあわせて、清代に隆盛した詞律・詞韻に関する研究を正當に位置付け、繼承・發展させていくことも必要であろう。

以上四點を中心として、日本における詞論研究が今後益々發展することを期待したい。

附記

本稿は、2000 年 11 月 13 日から 11 月 15 日にわたって開催された「中國古代文論研究的回顧與前瞻國際學術研討會」（於上海・白玉蘭賓館）において提出・口頭発表した中國語原稿（原題・「20 世紀日本的詞論研究」）をもとに、加筆・修正を行ったものである。發表の機會を與えて下さった復旦大學の嶋國平・楊明兩教授、また當日の發表に對して御教示を賜った復旦大學・金澤大學の李慶教授と香港中文大學の吳宏一教授、ならびに研討會參加者各位に厚く御禮申し上げます。

同研討會には、中國、香港、マカオ、臺灣、韓國、アメリカ、日本などから、九十名あまりの研究者が參加し、二つの分科會に分かれて活發に討論を行った。日本からは、甲斐勝二氏（福岡大學）、嘉瀬達男氏（立命館大學）、釜谷武志氏（神戸大學）、下定雅弘氏（帝塚山學院大學）、諸田龍美氏（愛媛大學）、および筆者の六名が參加した。研討會で發表された各論文や討論の内容等については、周興陸・楊彬兩氏の「尋找古文論研究的新起點—20 世紀中國古代文論研究的回顧與前瞻國際學術研討會側記—」（『文匯報』2000 年 12 月 2 日號掲載）という記事に、簡略に紹介されている。なお、今回の研討會に提出された論文は、論文集として刊行される計畫という。